

留守 作 田辺剛

## 《登場人物》

○男

○女

現代の日本からは時代も場所も遠く離れた世界。荒野の町にやってきた移動遊園地。舞台はその遊園地を営む社長の、従業員には団長と呼ばれるその部屋。それはトレーラーハウスでもある。狭い室内に社長の机、その上にはりんごやバナナなどの果物が盛りだくさん。カゴと電話機、筆記具などが置いてある。室内にはその他に扇風機、椅子が数脚。出入り口と窓が一つずつある。

興業の最終日。暑い季節の夕方頃。明かりが消された無人の室内。外では賑やかな音楽が流れときおり花火も打ち上げられる。ドアをノックする音が数回。音が途絶えて少しすると窓から中を覗く男の顔が見える。部屋が無人であることを確かめるとその顔は引つ込む。ドアを開ける音。部屋の明かりがつけられて男が恐る恐る入ってくる。室内の熱気と臭気にたじろぐ。窓を開けると外の賑わいが鮮やかになる。男は扇風機のスイッチを押す。机にある果物の一部が傷んで臭いを発していることを知る。痛んだ果物とまだ傷んでいない果物とを何気なしに分ける。りんごはまだ傷んでいない。

男は入り口近くの椅子に座り初めて入る団長の部屋を見回す。何かを待っているように見える。しだいに落ち着かない様子が目立ってくる。立ち上がり窓の外を見たりもするだろう。机のりんごを再び手に取ろうとするとところで電話が鳴る。

男は驚き椅子に戻る。電話のベルを聞いた誰かがここへやって来

るかもしれない。

男  
……。

電話は鳴り続ける。男はドアを開けて外の様子を見る。誰もいないようだ。しびれを切らした男が取ろうとすると電話は切れてしまう。

男  
……。

男は果物カゴからりんごを手取る。食欲がわく。汚れを見つけて服で拭く。  
ドアから鍵の開け閉めをする音。男は慌ててりんごを床に転がしてしまふ。続けて扉が開く音。女が入ってくる。掃除道具と果物などが入った手提げ袋を持っている。

女  
誰。

男 いや……（と部屋を出ようとする）  
女 ちよつと（と立ち塞がり臭いに気づく）……ん、なに。

男 オレは……

女 （机に目を遣り）ヤダ。

男 バナナが。

女 バナナ。

男 ブドウもだけど臭いがヒドいのは

女 食べなかったのね。

男 オレは、

女 あんたじゃない。団長が。

男 ああ団長か、そうか。

女 （落ちたりんごを拾って）触った？

男 まあ。

女 どうして。

男 臭いに移るといけないだろ。

女 落ちてる。

男 それはまあなんだ……丸いから。

女 窓も？

男 開けた。

女 これ（扇風機）は。

男 空気を……ほら、入れ替える方がいいだろう？

女は扇風機を止める。

女 どうやって中に。

男 開いてた。

女 開いてた。

男 鍵が。

女 鍵。

男 かかってなかった。

女 あんたがいるってことはそうでしょうね。

男 呼ばれたんだ。

女 呼ばれた。

男 団長に。

女 ここに來いって？

男 だから來た……いやオレだって変だとは思ったけど……ノックはしたよノック、そうちゃんと。けど返事が無いから……窓から中を見て、窓。

男 ちよつとだけでもちろん、団長にもしものがあつたらつてな、けど誰もいない。出直してもよかったんだ……

女は果物の入れ替えをする。

女 仕事は。

男 え。

女 従業員の顔はだいたい覚えてるけど……あんたは……

男 （気に障って）ふんっ。

女 わたしは長いからね、けどうーん……新人？ 案内係……

男 （舌打ちをする）

女 じゃない……（男をジロジロ見つ）料理人……にしては不潔……

機械技師……あんたの臭いは機械油じゃない……警備員？ どっちかっていうと追い払われる方だし……まさか事務方……いやあの仕事には知性が必要だからね……あ、動物か。

男 芸人だ

女 （男のことばが聞こえずに）そうでしょ動物の担当。

男 いや……

女 ゾウ？ 馬？ いや意外とウサギの線もある……

男 芸人だ。

女 え。

男 芸人。

女 ゲイニン？

男 芸人部屋についてる。

女 （ガツカリしたように）なんだ芸人か。

男 あんたは。

女 わたし？

男 あんただって勝手に団長の部屋に入ってきている。

女 わたしには資格があるから。

男 シカク？

女 この部屋を掃除するの。鍵だって持っているほら（と見せる）。

花火がまた上がる。

女 約束は？

男 え。

女 何時の約束、団長。

男 パレードが始まる頃だつて。

パレードの出発を告げるラッパの音。

女 あなたは約束どおりつてことね。

男 そのとおり。

女 ここで話をする事になっている。

男 団長と。

女 仕事を放ったらかしで。

男 こっちの方が大切だろ。

女 こんな一番忙しい日に？

女は部屋を出る。女にペースを乱された男は自分を落ち着かせようとする。

男 よし……よし……（団長との面談を妄想して）団長……あいや社長……すみません、いつもの呼び方でつい……けどはい、ここでは正しい呼び方でお呼びするべきかと……ハハ……やはりいつも最後の日というのは盛り上がるもんですね。こんな小さな町のどこからあれだけの人が沸いてくるのかってね……はじめはこんなところに客なんかいるもんかって正直思ったもんでしたけど、なんせ周りは荒野が果てもなく広がっている。道もデコボコだらけ。わたしが乗った車のタイヤがパンクしちゃったほんです。この部屋のタイヤは大丈夫ですか？そうですよ、こんな立派なトレーラーハウス。ちよつとやそつとで

タイヤがパンクするなんてことはないでしょう。わたしが紹介した、ね、引つ張ってる車もたいしたもんです。なんせ団長の部屋ですからね、パンクどころかタイヤに踏まれた岩の方が粉々に潰れてしまうんじゃないかな。ええ……それにしてもどうですこの賑わい！ オープンの準備のときに見えたんです。荒野の向こうに砂煙が立って、それが段々こつちに近づいてくる。ありや遠くから客が車で押しかけてるんだつてね……いや社長だつてそのくらいのことはご存知ですわね。大変失礼いたしました……わたし？ ええ、準備の時には動物を洗ってます。ロバですロバ……ずっとロバ洗いの担当でして、はい、わたしは芸人ですよもちろん。芸人部屋についてます。けど芸人つっても客の前に出るまで特段することはありませんからね、それで朝の準備ではロバを洗うように……

男は机のりんごを手に取りかじる。

男 はて……誰に命じられたか……ああそうだ、先輩に言われたんです。お前は……お前つてわたしのことですよ、お前は動物みたいな臭いがするからそっちの方の手伝いでもしてたらいんだつてね、それで訪ねたんです動物小屋をね。そこにいた爺さんに連れてこられたのがロバの前……あの爺さん、えーつと、ほら、覚えてらっしゃいますか、馬に蹴られて死んじゃいましたけど、大砲の弾みたいに吹っ飛びましたよ。ドーンつてね。馬の蹴る力つていうのはスゴいもんだつてわたしや驚いたもんですハハ……あすみません余計なことを……今日お呼びになったのはやっぱアレですか……いやわたしは良く見えないんですよ。芸人部屋のケンカはしょっちゅうですからね。飛んでくるモノに当たったらたまったもんじゃありませんから近づかないようにしてるんです、だから……あの日だつてケンカが始まる前に外へ出ました。気配で分かるんです。ええ、メイクをしてたところなんですがね、道具ごと持つて……鏡が欲しかったから女たちのとこに行こう

かとも思っただんですが……ハハ冗談ですよ冗談……便所です便所におりました。楽屋のほかに鏡があるのはあそこくらいですからね。悲鳴が聞こえたもんで戻ってみれば、ほれ、あのでっかいデブが仰向けに倒れてたってわけで……（大きさを示して）このくらいの……そこそこのナイフなはずですがあいつの胸に刺さると、小さな十字架みたいでしたね。犯人がああのアヒロアヒロだって聞いてさらに驚きましたよ。よくやるもんだって。逃げたらしいじゃないですか。車盗んで。だからわたしは……これは誓って申し上げますが、そのケンカにはまったく関わっていないんです。もとも……え？ 違う……ハハ、わたしやてつきりそのことで呼び出されたのかと……参ったな……じゃあいつたはどうして……

女 （戻って）本当に呼ばれたの？

男 （我に返って）え。

女 あんた。団長に。

男 もちろん。

女 けどおかしいじゃないか。団長はいつも……この時間は隣町に出かけてる。この近くにもいない。聞いてみたんだよたったいま、受付の連中も見えていないって。あんなに目立つ人、気づかない人なんていないからね。そうだろ。

男 そんなことくらいオレだって分かってる。

女 （机のりんごがないことに気づき）あれ？

女、机の周りに落ちていないか探す。

男 これ……（とかじったりりんごを見せる）

女 あんた……

男 いやちよつと魔が差しただけなんだ。

女は表情がこわばり急に退出しようとする。男は察して行く手を

阻む。

男 違う違う。

女 いまここを通してくれたら大きな声は出さないであげる。一〇分。一〇分外で待っていてあげるから静かに出て行きなさい。もちろん何も持っていないで。だいたいここにお金はない。

男 盗みに来たんじゃない。

女 分かった。りんご。床に落ちたりんご。お腹が空いていたのね。果物はどうせ取り替えるんだから、りんご一個ならわたしがごまかしてあげる。なんていえばいいかしら……わたしが間違っただけさお客さんのところに転がしてしまっただけ「これちようだい」って言われてついあげちゃったって……

男 オレは芸人だ。言っただろう。

女 泥棒といっしょでしょ芸人なんて。通して。

男 寸劇してるんだ。

女 は。

男 どっちかっていうと役者だ。芸人というより。

女 ヤクシヤ。

男 大道芸の後がオレの出番だ。

女 あんた、役者は芸人よりマシだって言うんだね。

男 ほらそう……この前の町、海のそばにある……嵐が来て何日も休みになっただろう。あの時に採用されたんだ。嵐が去っても辺り一面水浸しで、大道芸もオレたちの寸劇もお預けに。そうさ、ずっと水かきの仕事をさせられたからな。だからお披露目はここに来てからだ。あんたがオレを見たことがないのはそういう理由だ。みんなバタバタしてただろう。

女 たしかに水はけの悪い場所だった。

男 はいてもはいても水たまりがなくならない。

女は窓の外を従業員が通りがかるのに気づく。

女（窓の外に向かつて）ねえちよつと。（相手を認めて）……いいところに来てくれた。この人知ってる？（男に）ほら。

男も窓際へ寄る。

男やあ。

女芸人だって言うのよ。あなた芸人部屋によく出入りしてるでしょう。男もちろんだ。彼にはいつもよくしてもらってる。このあいだだって怪我の手当をしてくれた、な。

外の人物がなにかを喋っているようだ。

男ほら。

女そう……

男（外の人物に）ありがとう。お前もこっちに來ないか。団長の部屋。入ったことないだろう。オレも初めてなんだ。外から見るとボロボロのトレーラーハウスだけだな、中はほら、しっかりしている。

女勝手に入れないで。

外の人物は去ったようだ。

男またな……どうだ聞いたか、オレは泥棒じゃない！ ここのれっきとした従業員で芸人部屋についている。

女この部屋の主みたいな威張りよう。

男りんごは、ま、ちよつといたでしまったが、その他になにもやましいことはない。後は団長がここに來さえすればすべてがはつきりするというわけだ。あんたの思い違いだってことがな。

留守

女何の話。

男え。

女団長との話って、なに。

男それはまだこれからだ。

女大事なこと？

男きつとそうだろう。新人にしてはよくできてから給料が上がるのか、もつと偉い役目をおおせつかるのか。

女じゃあ出ていって。

男は。

女団長が来るなら、來そうにもないけど、わたしの仕事を済まさないと。

男いたっていいだろう。

女出ていって。人呼ぶよ。扉の前で待ってればいいじゃない。幸運にもそこで団長が現れたら、わたしのことを言ってもらっていいわ。団長のお部屋にいま掃除が入ってますってね。

男が部屋を出ようとするとき電話がなる。

男さつきもだ。

女さつきも？

男それを聞いてあんたが來たのかと思った。

女なんだって。

男なにが。

女電話。

男オレは出てない。そんな勝手ができるわけない。

女じゃあ鳴りっぱなしだったってこと？

男……。

女は電話を取る。

女 ……はい、わたしです……掃除の時間ですから……（男を見て）ええ、います。今日お約束をなさったとか……ずっと待っておいでですよ。鍵が開いていたとか……はあ……いまどちらです？ ……そうですか。代わりましょうか……ええ、はい、そのように伝えます……はい……え、どんなご用件でしょう……はあ……分かりました……はい……（と電話を置く）

男 ……団長か。

女 次の町にいるんだって。

男 次の町。

女 本当かどうか怪しいもんだけど。

男 次って大きな町じゃないか。

女 帰るから待っておくようにって。

男 団長が？

女 そう。

男 待っておくように？

女 そうね。

男 やっぱりな、オレは間違っていない。

女 出ていってくれる？ 掃除しなきゃ。

男 新しい服に着替えてこよう。わざわざオレのために帰ってきてくれるんだからな。こっちだってそれなりの準備が必要ってもんだ。

女 いいわよそのまま。

男 あんたはあんたの仕事をすればいい、オレにはオレの仕事がある。

女 ……。

男 残りはやるよ。

男 はかじったりんごを自分が座っていた椅子に置き、意気揚々と出ていく。

部屋の掃除が終わってしばらく後。部屋には男が一人、椅子に座っている。男の服は変わっていないように見える。ニヤついて妄想にふけている。

外のパレードは終わり日も沈んだ。遊園地の営業は続いている。

男 （団長との面談を妄想して）やめてください、わたしなんか無理に決まっています。もっとふさわしいヤツがいるでしょう……まあすぐには思いつきませんが……あのほら、お手玉するメガネ。あれなんかどうです。あいつは東の出身だっていいですからね、ちよつとノロマなところはありますが頭は賢い……え、そうなんです。見えないなあ……ダメですか……だったらタイヤを持ち上げるあいつがいます。腕っぷしであの怪力にかなうヤツはいません。それにああ見えて曲がったことは嫌いですからね、でしょ？ ……まあ確かに、はい、ことばの問題はあります……ええわたしにもさっぱり、あれはいったいどの国のことばなんです……仕切るヤツのことばが誰にも分からなければ役には立たないでしょうね……しかし（笑みを隠しきれず）……わたしに務まるでしょうか。芸人部屋のなかでは新人です……自信がないってわけじゃないですよ……わたしだってビシツと言うときには言います。そのくらいの度胸は持ち合わせてますよ……いったいわたしに人の上に立つということが……死んだ母親が聞いたら驚きのあまりもう一回死んでしまうでしょうね……どうしたものか……そうですか、団長……あいや社長。社長がそこまでおっしゃるならここはひとつ……

ドアを開ける音がして男は我に返って咳払いなどする。

女 （現れて）誰？

留守男 え。

女 ……独り言？

男 なにが。

女 なにか話してたでしょ。

男 いや……

女 は椅子に座る。服が着替えられている。

外の音楽が室内の沈黙を強調している。

男 ん。

女 え。

二人はただ座っている。

男 ……掃除か。

女 終わったわよ。

男 そうだな。

女 （部屋を見回して）見違えるように。

男 そうだな。

女 ゴミが落ちていないのは当たり前。きれいかどうかは問題じゃない。調度品の位置も正確に整えている。ほらこの椅子、少し斜めになっっているのが分かる？ （椅子を机に正対させて）机に対して真っ直ぐじゃない。（椅子を机に対して少し斜めに動かして）こう。こう。こーうじゃなきゃいけないって。

男 それは団長が決めるのか。

女 わたしが決めたの。世界を旅する遊園地の社長だもの、その部屋だって威厳というものが無いといけない。外からの見てくれはボロボロでもね、中は別世界のように。

男 団長もさぞ気持ちいいことだろうな。

女 （床に落ちたりんごの芯を見つけて）あ！

男　なんだ。

女　あんたこれ。（と拾う）

男　大丈夫だ腐ってなかった。

女　どうして落ちてるの。

男　食い終わったから。

女　で？

男　え。

女　食べ終わってどうしてここに。

男　どうしてって……用済みだろ。あんたは芯まで全部食べるのか。

女　捨てたのね、この床に。

男　うまかった。

女　信じられない。

男　なにがだ。

女　汚れたじゃない。

男　いや、汚れてるか。

女　はりんごの芯をつまんで出ていく。

男　（女に）食べたから捨てただけだろ……フンっ、ああいう女はダメだ。食べたいなら食べたいって素直に言えばいいだけじゃないか……（妄想に戻ろうとして）ああ、団長……どこまで話したっけ……「死んだ母親がもう一回死んでしまう」の後だから……団長……

机の上にあるバナナが男の目にとまる。男はバナナを手を取る。

男　腐っていないバナナはいい匂いだ。

男は丁寧にバナナの皮をむく。そこへ女がモップをもって戻る。

女　なにしてるの！

男　果物って一口に言うけど、世の中にはいろんなものがあるんだな。りんごとは色もカタチも匂いもまるで違う。あんたもどうだ。腹減っただろ。

女　それは団長が食べるために用意されている。

男　これだけ待たされてるんだ一つくらい大目に見てくれるさ。

女　二つ目じゃない。

男　バナナは一本目だ。

女　あんたはこれ（モップ）。

男　掃除は終わったんだろ。

女　りんごの汁で床が汚れている。

男　汁なんて……

女　（床を見て）ここよここ、ほら。りんごの汁ですこし光ってる。

男　ピカピカで結構じゃないか。

女　早く！　団長が戻ってくる。

男　オレが？

女　あんたが汚したんだから（と渡す）……それにわたしが掃除してるところを団長に見られたらどうするのよ。今までなにしてたんだって、わたしが怠けてたってことになる。モタモタしてるなんてゴメンだわ。

男　オレが掃除したらオレが汚したみたいじゃないか。

女　そのとおりじゃない。

男　フンっ。（と渋々モップをかけ始める）

女　それ（バナナ）。

男　どうする。

女　机に戻すわけにはいかないでしょ。（と男からバナナを受け取る）

女はバナナを持って出ていった。

男は床にモップをかけ始める。

外で銅鑼が叩かれる音が響いている。



男 ああ始まるんだな。オレの代役……若い才能を信じよう。初舞台がオレの代役っていうのは荷が重いだろうが仕方ない。せめて芝居を台無しにするようなことにならなければ、そう、それでいい。若いヤツらには未来がある。多少のことなら乗り越えていける。かといってあまりにうまくいきすぎると、それはそれで本人のためによくない。そこが難しい……。

女が戻る。

男 （床を指して）どうだ。

女 ……。

男 オレは毎日動物小屋の掃除を手伝ってるからな。

女 戻ってきて。出て左に置くところがある。

男がモップを持って出て行く。

女は大きなため息をついて椅子に座る。外の音楽が室内の静けさを強調している。やがて男女の抑えた笑い声が戸外にやってくる。窓のすぐ向こう側でキスをする音、そしてまた抑えた笑い声。なにか話してもいるようだ。

女は静かに立ち上がり外の様子をのぞき見る。

男の声 なにしてるんだ、仕事しろ！

戸外の男女は逃げたようだ。

男 （現れて）サボってやがった。分かったか？ そこ（窓）から見えただろう。

留守  
女 いや……

男 男はあいつだ。運転手。この部屋を引っ張る車の、

女 （察しがついて）ああ……

男 車を新しくしてそれで自分も偉くなったと勘違いしてるんだ。

女 若い男の子はそんなもんだよ。

男 自分の車でもないのに。

女 だんだん分からなくなるのよ。他人のモノと自分のモノとが。

男 女は誰だろう、新人かな。

女 新人はあなたでしょ。ここにいる人間の顔を全部知るには時間がかかる。（と椅子に座る）

男 本当はこの部屋を新しくしたかったらしい。けどなんせ金がかかるからな、まずは車の方からって、前の港町で調達したんだ。

女 （ため息）

男 どうだ。

女 なにが。

男 床。

女 まあいいんじゃない。

男 そうかよかった。

短い沈黙。

男 なんだ。

女 は。

男 まだなにかあるのかオレがすること。

女 もういい。

男 じゃあ出て行ってくれ。

女 は。

男 掃除をすればあんたの仕事は終わりだろう。ここにいる理由はない。……。

男 それとも団長が来るまで話し相手にでもなってくれるのか。

まあそれはそれで悪くはないが、オレはいま練習をしているんだ。

女 練習。

男 団長との交渉さ。仕事の責任が増えるとなればそれに見合う報酬っていうものが必要だ。オレの生活がかかってるからな。団長に言われるままで黙ってるわけにはいかないだろ。何を言われてもすぐに返事ができるように。しかもだ。交渉するのは「はい」か「いいえ」で済むことじゃないからな。機転をきかせなきゃならない。港で荷物運びをやったとき、船主とオレのボスが交渉しているところを何度も通りがかった。粘り強く、けど相手を怒らせてもいけない。時には話をズラしたり、少し遠回りをして元の話に戻るってこともする。その練習だ。待てよあんたに団長の代わりをしてもらうのも……

女 呼ばれたの。

男 ん。

女 わたしも呼ばれたの。

男 呼ばれた？

女 さっきの電話。

男 誰に。

女 団長よ。

男 あんたも。

女 だからここにいます。

男 どうしてあんたまで。

短い沈黙。

女 服。

男 え。

女 着替えてくるって言ったじゃない。

男 ……着替えたよ。

女 え。

留守

男 着替えた。

女 同じじゃない。

男 フン、まるで違うじゃないか。

女 どう違うの。

男 どう見たって綺麗だこっちの方が。

女 ……そうかもね。

男 オレに話があるってことは分かっている。けどあんたは……だいたい順番だろ。呼ばれたのはオレが先だ。その辺りで待ってればいい。オレが知らせてやる。交代だってね。見えるところにはいてくれよ。

銅鑼の音。

女 なにをやっているの。

男 は。

女 役者なんですよ。何の役？ 寸劇いまちようどやっているとところじゃ10  
ない。

男 (大きなため息をついて) 役者っていうのは不思議な商売だ。オレも団長に見初められるまで、自分にそんな才能があるとは思いませんでした。港で船に荷物を運んでいるオレを見てだよ、「ちよつときみ」って声をかけてくれたんだ。あの人はすごい人だよ、ダイヤモンドを見てダイヤモンドだと言える人間はたくさんいる、いや、誰もがそうだ、けどあの人は違うんだな、ただの石ころを見てそれがダイヤモンドになることを見抜く力を持つてらっしゃる……自分の人生がそんなことになるなんて……いや……なあ想像したことがあるか？

女 ない。

男 そうだろうな

女 だからなにやってんのさ。

男 言ったじゃないか？

女 は。

男 ダイヤモンドだ。

女 ダイヤモンド。

男 ……になるところの石ころ。

女 ん、どっち。

男 石ころだ。

女 イシコロ？

男 そう。

女 石ころ……の役。

男 おいおい勘弁してくれよ、あんたここ長いんだろ。機械仕掛けの乗り物だけじゃない、動物だってマジックだって寸劇だってやってる。

その中でも素人には分からないような仕事や裏の役目っていうのもたくさんあるんだ。

女 けど石ころって人じゃないでしょ。

男 当然だ。石ころだからな。

女 それを寸劇で？

男 そうだ。

女 けど石ころなんてどうして？ あつてもなくても同じじゃない。

男 あんたいいことを言ったな。そこが大切なところだ。

女 はあ。

男 オレはあの舞台で石ころを演じている。ここからはちょっと見えな  
いが、あのテントが邪魔だ。とにかく舞台だからな、みんなが舞台を  
見ている。けれどもそう、あんたが言うとおり、舞台にはいる。けど  
誰も気にしない。いるけどいいのと同じ。それが石ころだ。

女 台詞は？

男 あるわけないだろ！ 石ころだぞ。

女 ゴメンナサイそうよね。

男 石ころがしゃべり出したら目立って仕方がないじゃないか。そんな  
の台無しだ。ああ……オレは芝居のことをペラペラしゃべるのが嫌い  
なんだ。なにかも分かったような顔をして。いるだろそういうヤツ。

女 じゃあなに、ジツとしてるっていうの、本当の石ころのように。

男 フンッ。舞台でなにかしなくちやいけないと思ひ込んでるヤツはも  
う役者じゃない。ただの出たがりだ。なにかする必要はない。ただい  
る、それだけで十分。だからこそ石ころなんだ。

女 お話に必要なの。

男 あんた観たことないのかいまの新作。

女 まだね。

男 だったら楽しみにとっておいた方がいい。

女 いいじゃない聞かせてよ。劇の結末を知ったところでわたしは冷め  
たりしない。

男 だからオレは芝居の話が嫌いなんだ。

女 南の国のお話だったかしら。

男 北だ。北の王様。

女 北の王様……

男 そう、家来にも息子たちにも裏切られて国を追放される話だ。吹雪  
の強い夜にロバを一頭与えられただけで城を放り出されるんだが、と  
にかく風が吹かない方へ行こうとする。しばらくして振り返るんだ。  
遠くに見える我が城は真つ暗な空の下で煌々と輝いている。ああ、ど  
うして自分はこんな運命になったのかどこで間違ったのか……王には  
分からない。ただやり場のない怒りと情けなさがとめどもなくこみ上  
げてくる。ロバが鳴く。風と雪が顔を打ち付ける。王は悔しくてたま  
らない。涙もとめどなく流れてくる。そこでヤルんだ。

女 ヤルって？

男 蹴飛ばすんだよ、そばにあった石ころを。裏切り者たちのところに  
……そう、せめて一撃でも食らわしてやれたらってね。けど蹴飛ばし  
た石ころは遠い城に届くはずもなく、そりやそうだよな、近くの茂み  
にコロコロと転がって消えていくだけなのさ。そうして王はロバに引  
つ張られるように歩いて行く。どこへ行ったかは誰も知らない。

女 ……。

男 ああ、つい話してしまった。けど分かるだろ、最後の場面。王様が蹴飛ばすところがそこに無いとしたらどうだ。締まらないだろうお話しが。すべてこの場面向かっているんだからな。

女 やってみて。

男 は。

女 あんたの役。

男 ここで？

女 そう、どんな感じか。

男 おいおい。バカにしてるのか。役者っていうのは……フンっ、手品師じゃあるまいしパツとやってみせろってそんな……

女 わたしがここに入ったのは二十歳を過ぎた頃だった。当時からいろんな出し物があつたわ。手品、マジック、歌、踊り、大道芸と芝居も。いろんなものをたくさん見た。そしてなぜだかわたしがいいといった芝居なんかは大当たり。すると一気に客が増えたりね、本業の遊園地よりも芝居の方が評判になって団長は困っていたわ。それで頼りにもされていた。団長は忙しいからわたしがアドバイスをするの。あの役者は使えるとかあのマジックは新しいとか。だからあなたの役者としての才能がどれほどのモノか見ることができる。団長の好みだってあるけどね、それも含めて……まあ、だからちよつとやって見せてよ。ねえ……

男 は静止しているように椅子に座ったままだ。

女 果物食べたこと、大目ににみてやったでしょ。

男 ……

女 聞いている？

男 やってるだろ！

女 え。

沈黙。

女 いま……これ？

男 ダメだ……ちよつとあんたこれ。（とポケットから紙を出す）

女 なに。

男 （紙を渡して）読んでくれ。芝居は一人じゃできない。相手役あつてこそだからな。

女 小さな字！

男 一番上からでいい。

女 台本これ？ いつも持ってるの。

男 当たり前だろ。北の王様の台詞だ。

女 北の王様……

男 は扇風機をまわして女に向ける。

女 なに。

男 吹雪だつて言っただろ？ 吹雪の夜だ。とてつもなく寒い……（女が扇風機に背を向けるので）おいおい。

女 え。

男 そっち（風が吹く方）を見るんだ。

女 寒いんだけど。

男 寒くない。追い出された城は風上にある。

短い沈黙。

女 じゃあ……

男 （椅子に座って静止している）

女 「ああ……アレ、ハ（字が小さくて読めない）、あれは！ クラ……クラ、ヤ……暗闇にともされた口、ウ、ソ、クの明かりのように見え

るのは我、が、城。ただ明るいだけ……じゃない。その光は人民がヨ  
ルニ……（咳払いして）その光は人民が夜に飲み込まれてしまわない  
ように、その暖かさは凍てつく寒さに人民がやられてしまわないよう  
に、そう、それはまさに我が国の希望そのものなのだ。けれどもその  
希望はここまで届かない。わたしはすっかり遠くへ来てしまった。あ  
あ、どうしたことだろう。長い冬に耐えられない……（扇風機の風に  
震える）……耐えられない太陽に代わってこの大地を守るのがわたし  
の使命。わたしは誠実に務めてきたではないか。それを不実な息子た  
ちの謀略によって奪われてしまった。いや、奪われたのはなにより人  
民の生活ではないか、そう、わたしの運命などはどうでもいいのだ。  
ああ寒い、雪や風もわたしを城から追いやりとうと打ち付けてくるのか。  
敗北か、これは敗北なのか」

馬の鳴き声。

女 「（側にロバがいるていで）ああロシナンテ。泣くでない我が駄馬よ。  
さあ行くことにしよう。夜の闇も冷たい風もずっと追いかけてくるわ  
けではない。南へ。そう、南へ（と手綱を引こうとするがロバが抵抗  
している）……そうだ、こっちだ……」

女は男に寄る。台本にはそこで男を蹴るように書かれているが女  
は蹴らない。男は手で自分を蹴るよう合図する。

女 「えいっ。」

女は台詞を言うだけで蹴ろうとしない。

留守 男 ……（姿勢を変えず）蹴るんだ。  
女 いいわよ。

男 どうして。

女 どうしてってだって……

男 蹴らないと

女 人を蹴ったことがない。

男 芝居だろ。

女 芝居って……

男は蹴られたていで勝手に椅子から転がり落ちる。女は驚く。

沈黙。外の音楽が響いている。

男が静かに起き上がり女を見る。女も男を見返して二人は見つめ  
合うようになってしまう。男が咳払いをして椅子に座り少しうっ  
むく。女も緊張がほじめてロバを引く手綱の手をやめる。

女 （紙切れを渡して）これ……

男 よくできた台本だ。もちろん団長が書いた。あの人はたいした作家  
先生でもあるんだな。続編があるらしい。南へ向かった王様がサーカ  
スの一団と出会う話だ。

女 わたしたちはクビになるのよ。

外からはゾウの鳴き声と歓声。男は扇風機を止める。

女 もっと早くに言ってあげた方がよかったかもしれない。今日がこの  
町の遊園地は最後の日。明日は次の町へ向かうでしょ？ あなたが前  
の港町で声をかけられたように、団長は次の町での興行のために新し  
い才能を見つける。新しい人が加わった分、古い人間を置いていかな  
きゃいけない。車の席には限りがあるからね。最近自分勝手に辞  
める者が何人かいたから団長がわざわざクビにすることはなかった。  
男 芸人部屋で殺されたでつかいのと殺して逃げたヒョロヒョロで二人  
分の席が空いてるはずだ。

女 だからそう……新しい人間がもっと入るってことなのよ。その二つの席では足りないくらいにね。

男 誰だ新しいヤツって。

女 知らないわよ。

男 けどオレはほら……今夜の団長の話で芸人部屋の仕切りを任されることになる。まあ確かに、給料をいくら上げるかで多少はもめるかもしれない……だから交渉……けどそもそもオレっていう人間は金にはそんなにこだわってないんだ。まさかそれだけの責任を負わされたのに減るっていうことはないだろうからな。大切なのはそれがオレにふさわしい仕事かってことだ。よく考えたよ。オレにそんな責任を果たす力があるのかって、だってただの荷物運びだったオレがだよ。芸人部屋はクズどもの集まりだ。殴った殴られたは朝昼晩、盗んだ盗まれたは三時のおやつみたいなものだ、さすがにこのあいだの殺しは久しぶりだと聞いたがね。そんな猛獣よりも猛獣なヤツらをまとめることができるんだろうかってね。考えた。けどオレは引き受けるって決めたんだ。

女 いった言われたの。

男 なにが。

女 その話、部屋を仕切るっていう……

男 まだ。

女 まだ？

男 団長が折り入って話をしたいっていうんだ、あの団長がだぞ、そういう話に決まってるだろう。

女 わたしたちはクビになるのよ。

男 そんなわけない。あんただってまだ聞かされたわけじゃないだろう。どうして分かる。

女 出発の日の朝だと何かと遅すぎる。荷物だって自分のをまとめなきゃいけない。他の人のモノとごっちゃになる前にトラックから引っぱり出さなきゃ。そうでしょ？ けど遊園地をやってるまっ最中だと早

留守

すぎる。クビだからって仕事があるのに急にいなくなるわけにはいかない。給料を棒に振っても構わないなら別だけど。だからそう……従業員をクビにするのはいつも決まってこの最後の日の夜なのよ。

電話が鳴る。

女 あんたはまだ知らないでしょ。わたしは知ってるの。

男 ……。

女 わたしは知ってるのよ。(と電話に出る)……はい……わたし？ わたしは掃除の係ですが……はい、団長はいま外出中……

男は電話の相手が団長でないことを知ると外に出る。

女 はあ……えわたしですか、ですのわたしは掃除係でして団長の部屋をいま……ええ団長がいらっしゃらない時は代わって電話の対応もこうして……いえ、そういう者では(と相手の怒鳴り声に受話器を少し遠ざける)……(息をついて)お嬢さん落ち着いてください。よろしいですか、団長はいま大きな町に出かけ……あ、でしたらお分かりだと思えますがいまこちらに向かっていると、すぐにはたどり着かないと思いますよ。いつまで一緒にいらっしゃいました？……はい……だったらまだまだ時間が……あの……出すとか出さないの話ではなくまだ……隠してません……わたしはただの従業員で……ああお嬢さん泣かないで、ほら、泣いてると団長に嫌がられるでしょ。そう、あの人は誰にでも言うの。従業員だけじゃなくね、いつも微笑んでいるように。まるで人形が……(急に電話を切られて)あれ？ もしも……

女は苦笑する。外では爆竹が鳴っている。

男 (戻ってきて) まだだ。このくらいの時間になるとこっちへ向かう車があれば遠くからでもすぐ分かる。ヘッドライトの明かりが見えるからな。日中は巻き上げられた砂煙を探すしかないから難しいんだ。けど……

女 すぐには帰ってこない。

男 どうして分かる。

女 いまの電話で。

男 団長じゃないんだろう？

女 一緒にいたっていう人。

男 誰。

女 知らないわよそんなの。ついさっき出たばかりのようだから。

男 そうか……だいたい本当に戻ってくるんだろうな。

女 ここに戻らなくてどこに行くっていうの。

電話口から椅子に戻ろうとする女が男の側を通る。

男 おい。

女 なに。

男は女の頬に手を伸ばす。

女 (身を引いて) なに。

男 食べたか。

女 え。

男 さっきのバナナ。オレが皮をむいた

女 食べるわけないでしょ。傷んだら捨てることになってる。

男 (女の頬を指して) バナナのすじ。

女は頬についたバナナのすじを取る。

男 何かを食べて初めて腹が減っていたことに気づく。ずっと食わなきゃ忘れたままなのにな、からだがい出すように気づく。腹が鳴るのはむしろ食べてしまってから、どこから湧くんだってほどの食欲があふれてとまらない。だったらずっと食べなきゃいけないか。食べることをやめてしまえば、もうどうやって食べるかなに食べるか考える必要もなくなる。しかもな、それを客に観てもらうのはどうかってね。みんな驚くに決まっている。何も食べない人間っていうのはどういうヤツなんだ、いつまで食べないでいられるのか見てみたいはずだ。尊敬すらされるところだね……(部屋を出る女の背中に) 誰にもいいやしない。

女は部屋を出た。短い沈黙。

男 まあけど、ひもじいのは辛いな。

外ではダンスパーティーが始まるようだ。

男 腹を空かしてない連中がなにかと踊りたがるんだよ。

歓声が聞こえる。

明かりが消された室内。机のバナナはすべてなくなっている。男は窓際にいて外のダンスパーティーを楽しそうに見ている。男は踊っている誰かを見つけからかおうと指笛を吹く。

男 ハハ……なにを驚いてる。踊れよ。

男の笑顔が落ちるように消える。  
ドアを開ける音がして明かりがつく。女が入ってくる。旅に出る格好をしている。

男 あんたは踊らないのか。  
女 ……。

男 オレもダメなんだ。人前で何かやって見せるんだっただけ。小さい頃からそう、目立つのが好きなガキだった。踊れと言われれば踊るし歌えと言われれば歌う。うまいわけじゃない、逆だ。メチャクチャなんだ。それを見てみんなが笑う。馬鹿にされてるぞって教えてくれる友だちもいたけどな、確かにそうなんだろう、けどオレは構わなかった。みんながオレを見ている。それがなにより大切なことなんだ。（窓の外を指して）けどああいうのはダメだ。あいつらは見せるために踊ってるわけじゃない。ただ楽しいから踊ってるんだろう、いやどっちだ、踊ってるから楽しいのか。

女 あんたが見てるじゃない。  
男 （笑って）ハ、そうだ。けどあいつらは見られてることを知らない。自分たちの世界のなかにいるだけなのさ。まあオレもあんたも歌や踊りとは縁のない人種なんだなきつと。これまでもこれから。

女 一緒にしないで。

男 は。

女 できないなんて言っていない。

留守

男 できるのか。  
女 多少はね。  
男 踊るのか。  
女 ……歌。  
男 歌。

短い沈黙。

男 ちよっと。  
女 は。

男 ちよっと。

女 ちよっと。  
男 なんでもいい。  
女 なんでも？

男 たとえ下手でも笑いはしない。そこは信用してもらっていい。

女 どうして歌わなきゃいけないのよ。

男 オレだって芝居してやっただろう。いいじゃないか。

女 アレのどこが芝居なのよ。

男 おいおい冗談じゃないぞ。

女 ジッとしてただじゃないぞ。

男 石ころの役なんだから当たり前だろ。

女 （鼻で笑う）

男 あんたが本当に歌えるなら団長に掛け合えばいい。わたしは掃除だけじゃない歌えますって、クビにする必要なんかないって……歌い手もちょうど足りないんじゃないかなかったかいま。なんならオレが口添えしてやってもいい。なかなか見込みがありますよってな。

女 いいわよ口添えなんて。

男 どうして。

女 意味がないから。



男 どういうことだ。

女 あんたも早く荷造りしなさいよ。

男 オレはクビになるなんて信じてない。どう考えたっておかしい。理由がない。採用されたばかりだし寸劇の役だって立派にこなしてる。みんなそう言ってる。

女 自分には分からない理由があるのよ。だからクビなの。

男 あんたは諦めが早い。確かめてからでいいじゃないか。すっかり出ていく準備が整っている。

女 (バナナが無くなっていることに気づいて) また食べたの？

男 これだけ待たされてるんだ。もういいだろう。ダメだって言うならなら給料から天引きしてもらえばいい。上がった分が少し削られるくらいどうってことない。

女 まだそんなこと言ってる。いい話に違いないって？ どうしてそんなに頭が悪いの。

男 そうだ、ひとつ団長に提案してみようか。あんたの歌とオレの芝居を合わせた新しい出し物を考えるんだ。そういう類いのものはないだろう？ いいじゃないか。あんたが何を歌えるのかにもよるけど。

女 ねえ、しばらくしたらダンスもお開きになる。

男 何言ってるんだ。朝まで続くパーティーだぞ。

女 帰る客もいるってこと。ほとんどの人間は月曜の朝になったら働かなきゃいけない。

男 ざまあみろってんだ。

女 ほんとに口が減らない男。

男 団長との話がもう済んでるなら、いまごろは飲み残しの酒を頂戴して機嫌良くやっているとこだ。あんたの言うとおり、帰り始める客がいるからな、うまくいけばおごってもらえることだってある。

女 その客にあんたからもお願いして欲しいの。

男 あんたの分も？

女 酒の話じゃない。ねえ、港の町まで帰る客を見つけるの。その車に

留守

わたしたちも乗っけてもらわないと。

男 どうして。

女 クビになっても団長にお願いすれば次の町まで連れて行ってくれるかもしれない。けどわたしが行きたい方向とは逆。

男 港の町へ行ってどうする。

女 港から船に乗る。

男 どこへ。

女 故郷。

男 あんた、海の向こうの出か。

女 分かるでしょ？ 女が一人で港まで行くのがどれだけ難しいか。

男 だからなんだ、オレについてこいっていうのか。

女 港の町で荷物運びをしてたんでしょ？ ちよいどいいじゃない。たとえ次の町まで連れて行ってもみんなとはそこでさよならなのよ。なんのあてもなくどうやって生きていくつもり？

男 だからオレはクビにならない。

女 (ため息)

男 本当にクビになるんなら行ってやるよ。

女 それを確かめる余裕はないの。

男 ……。

女 もしあんたが期待してるみたいに、なに、芸人部屋の仕切り？ そんな大きな役目を任されるならとくに伝えられてるはずでしょ。だって明日は移動の日なのよ。テントをたたんで掃除して、メリーゴーランドから小さな動物まですべてをトラックに積み込まなきゃいけない。部屋の仕切りをする人間がどれだけ大変かあなただって見てるでしょ。準備がいるのよ。それにやることが多いだけじゃない。急いでやらないとまた団長は不機嫌になる。部屋の仕切りをさせるならモタモタさせないためにも早く言わなきゃ。電話でも十分。

二人は電話を見るが電話は鳴らない。

男は部屋の外へ向かう。

女 クビを言うのは簡単。一言、「お疲れだったな」。団長の決まり文句。誰もがその一言に怯えている。悪い呪文のようにね。

男は外の様子を伺っているようだ。

女 誰か来る気配はある？ 仕事が終わった従業員は明日のために休むかダンスパーティーに加わるか。そのどちらでもない誰かがここに来る様子はある？

男は戻ってくる。無然としている。

女 分かったでしょう。勘違いしないで。ここから逃げようっていう相談じゃない。自分たちから出ていくの。

男 どうするんだ。

女 あんたも荷物をまとめて。

男 荷物なんてない。

女 だったらパーティーが終わるのを……

ドアをノックする音。

動けない二人。

再びノックする音がして男が外へ出る。

男の声 なにって団長に呼ばれたんです。それで待ってる……え、けど団長が……そうですけど……はい……これもですか……はい

男が戻る。

男 パンクの修理。

女 パンク？

男 ここに来るとき乗っていた車のタイヤがパンクしたんだ。道がヒドかっただろう？ オレが乗ってた車だけじゃない、他の車も大丈夫か見て回れって。この（部屋）下のタイヤも一本やられてるらしい……

女 これも？（と床を見る）

男 特にこいつがな（と床を踏みならす）。タイヤが大きいから一人でやるのは一苦労だ。

女 終わる頃には朝になる。

男 それが明日出発するためのオレの仕事だ。

女 どうしてあんたはそんなに素直なの。

男 素直って、言われたからやるだけだ（と部屋を出ようとする）

女 どこに。

男 このタイヤを見てみる……

女 修理したってあんたは一緒に行けないのよ。

短い沈黙。やがて窓の外から男の声が聞こえる。

男の声 ああ、これならそんなに手間取らないな。

女 （窓により）……だったらあんた、はじめにそのタイヤをなんとかしなさいよ。でね、修理が終わったら運転手のところに行くのよ。

出発前に車がこの部屋をちゃんと引つ張れるか少し試してみたいって鍵を貸してくれて。そう、わたしすっかり忘れていた。この部屋が動くお城だってことをね。城を置いて行く必要はない。城といっしょにここから去ればいいのよ。で、運転手が渋ったらこう言ってやるの、さっきそこで新人の女の子とイチャついてたんでしょ、だからね、「お前は団長が嫌うことを知ってるか、一つは動物の餌やりを忘れること、一つは机の上の果物が傷んでいたり足りなかったりすること、もう一つが仕事中に男が新人の女の子に手を出すことだ」ってね。きつと縮

み上がるわ。それでうまいことを言って車の鍵を手に入れられたら、他の車を探す必要がなくなる……（部屋を見回して）いいのよ……わたしが入ったばかりの頃はこんなに大きな集まりじゃなかったから、この部屋だって団長の部屋じゃなかった。みんな使ってた。フン……わたしがこれを選んだのよ。新しいトレーラーハウスを買ってみんなで寝泊まりするからってトレーラーハウスがたくさん売ってるところ、果てが見えないくらいに広がった。誰だったかしらもうやめた人だけど、その人が選ぼうとしたのがずいぶん大きなモノでも広くて豪華だったけど、お金も足りないし、そのときのわたしたちの車では馬力が足りなくてその部屋を引っ張れない。みんなどれにしようかってまとまらない時にわたしがこれにしようって、一番若い、幼いといってもいいくらいの小娘が言ったの。離れたところにあるこの車に駆けていって中から、こうしてね、顔を覗かせて団長に手を振って見せた。だって他は図体がデカいだけか、角張ってて古くさいものばかり。これが丸っこくて可愛かったから。ただみんなが寝るには狭くて、それは後で後悔することになるんだけど、反対する人もいた。さっきのもうやめちゃった人もね、けどわたしはこれがいって言い張る。そしたら団長、「じゃあこれはお前へのプレゼントだ」って決めたのよ。それがこの部屋。車に引っ張らせて世界を旅したの。

男が戻ってくる。

女 つい最近の話なのよ、ここが団長の、なに？ 「社長室」になったのは。けどもとはそう、わたしへのプレゼントなんだから、いいのよ。文句なんて言わないわ。そもそもあの人が何か言う頃にはそんなことが届かないほど遠くへ行っている。

男 やったことがない。

女 え。

留守  
男 運転。

女 ……本当に役に立たない人。

男 やったことがないって言ったただけだ。できないとは言っていない。

女 港までは真つ直ぐ一本道なんだからハンドルをじつと持っていればいい。まわす必要はない。

男 オレもそう言おうとしたんだ。

女 朝日が見える頃には着くはず。

男 じゃあまずは車の鍵だ。あいつだな。

女 どこにいろの。

男 いま踊ってる。

女 パーティー？

男 さっきあの新人の女と踊っていたから冷やかしてやったんだ。

女 わたしが行く。

男 あんたが？

女 あなたはタイヤを直して車輪止めもね、外すの忘れないで。

男 車輪止め。

女 それから電線。

男 電線？

女 電気と電話線が引き込んであるでしょ。いっしょに連れてはいけないんだから。（部屋の片隅を指して）この裏にある。

男 知ってるよ。

女 最後に大きな花火が上がったらパーティーはお開きになる。  
男 もうすぐか。

二人は窓の外を見ている。

女 なにしてんの。修理は今やればいいじゃない。タイヤはパーティーと関係ないでしょ。

男 あのブドウ。

女 なに。

男 あれも食べたいと思ってたんだ。けどりんごやバナナと違ってブドウは……食べにくい。手がベトベトになるし汁が服に着く。カバンに入れとくわけにもいかない。

女 潰れちゃうからね。

男 あきらめるしかないと思ってた。けどこの部屋ごと行くなら。

女 港についたらここでゆっくり食べるというい。

男 あれ？ けどどうしてオレはあんたと一緒に行くことになってるんだ。別にそうすると決めたわけじゃない。

女 だったら好きにすれば。あなたが見渡す限りの荒野を一人歩いていくのを誰も止めはしない。

男 そもそもクビになるとは

女 クビでしょ。

男 ……。

歓声が聞こえる。

男 失敗したら？ 車の鍵を奪えなかったり、タイヤの修理が思ったより難しかったり、

女 だったら帰る客を捕まえて……

男 誰も乗つけてくれないかもしれない。

女 その時は……

男 うん。

女 その時によるのよ。

男 ……。

女 不安なの？

男 そんなじゃない。

女 どちらにしても自分で考えて自分で決めなきゃいけない。

男 そうだ。

女 わたしは一人で何も無い荒野に残されるのはイヤ。

男 オレが頼りだってことなんだな。  
女 ……。

火花が上がりはじめ。

女 行きましょう。

二人は立ち上がる。

男 青いズボンにサスペンダーをつけて、いまどきの茶色の帽子と分かつてる。

短い沈黙。

男 この部屋を出ればあとは自分たちでなんとかするしかない。  
女 今までもそうだったのよ。忘れてただけ。

男は出ていく。女も出ようとしたとき電話が鳴る。女は振り向き電話を一瞥するが近づくことなく部屋を出る。

間もなく電話の音は明かりとともにプツリと消える。

無人の部屋には月明かりと外の火花の音が射している。

【了】